

令和元年6月7日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370474

研究課題名(和文) 言語リソースの評価からみた移動する人々の言語レパートリー変容に関する民族誌的研究

研究課題名(英文) Ethnographic Research on the Change of Linguistic Repertoire of people on the move: An analysis of evaluation towards their linguistic resources

研究代表者

村岡 英裕 (MURAOKA, HIDEHIRO)

千葉大学・国際教養学部・教授

研究者番号：30271034

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、接触場面研究、多様性の社会言語学に準拠し、言語能力の自己評価と社会的位置づけに焦点を当てて、移民個人の言語レパートリーの多様さがどのような接触経験の下での言語管理の蓄積によって生じるのかを明らかにすることを目的とした。その結果、(1)移民は直面した言語問題に沿って接触場面に向かう管理が行われ、原則やストラテジーが構築されていることが示唆された。(2)3言語使用者(英語、日本語、母語)が2言語使用者(日本語、母語)かによって、言語レパートリーの変容に影響を与える言語管理が異なっていることがわかった。また移民コミュニティへの参加の有無によっても、異なることも示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、移動する人々(移民)の語りから彼らの言語問題を考察した。その結果、少なくとも3つの言語問題の所在が明らかになった。(1)言語問題は彼らのネットワークの違いによって異なっている。(2)豪州調査と比較して日本調査では外国にルーツをもつ人々が使用する言語バリエーションが承認されない場合には、非母語話者としての位置づけを強いられる。(3)アイデンティティの葛藤によって、自分の外来性を潜在化させたり自分の言語や文化の規範を保つことを優先するストラテジーが見られた。本研究ではこうした事例研究によって多様な移民の言語問題に対応しうる、ボトムアップ・アプローチの言語政策が可能になることを提唱した。

研究成果の概要(英文)：Based on contact situation study and sociolinguistics of diversity, this study focuses on self-assessment and social positioning of language ability, and examines how the accumulation of language management through their lives in host society causes the variety of language repertoire of immigrant individuals.

As a result, it was suggested that (1) immigrants manage toward the contact situations in line with the language problems encountered, and that principles and strategies were constructed. (2) It was found that the language management affecting the change of the language repertoire differs depending on whether the trilingual user (English, Japanese, native language) or the bilingual user (Japanese, native language) because both groups face different types of language problems based on different social networks. It was also suggested that the difference may be caused by the presence or absence of participation in the immigrant community.

研究分野：社会言語学 日本語教育

キーワード：移動する人々 自己評価 言語バイオグラフィー 言語レパートリー ネットワーク 接触場面に向かう言語管理

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

移民言語の研究は、これまで北米を中心とした移民社会において言語接触論の枠組で扱われ、言語接触にともなう移民言語の体系的な変容 (e. g. 借用、混交、摩滅) が明らかにされてきた。さらに言語使用のストラテジー的な側面、たとえば、コードスイッチング、語用論的転移、新造語、二言語習得などにも関心が向けられていた。

国内においては、移民言語研究は、真田・庄司 (2005)、庄司の一連の研究 (後述)、生越等などに負っているが、いわゆる在日韓国・朝鮮人や在日中国人などのオールドカマーの歴史的な脈をおさえながら、移民の属性、母語などにもとづいた言語接触論の体系的な言語変容の研究枠組のもとに進められている。

言語接触論の枠組では体系からの変容・逸脱を言語変種 (Labov 1972)、エスノレクト (Clyne 2000) となづけて研究対象としてきたと言える。そのため、移民は1つの言語コミュニティ (speech community) に所属し、その言語体系を前提にすることが前提となっていた。

一方、外国人の言語問題を調査してきた接触場面研究は、言語が使用される場としてのディスコースと、言語問題の発生から調整にいたるプロセスを指す言語管理とに注目をしながら、具体的な場面の言語使用プロセスを対象としてきた。そこでは、移民が経験する言語問題の種類と範囲、移民の言語意識の変容、ネットワークの多様化、調整ストラテジーの項目などが明らかにされつつある (e. g. 村岡 2010)。

こうした接触場面研究は、イギリスやベルギーなどの Super-diversity (Vertovec 2007) として理解されつつある新たな移民社会から生まれた社会言語学 (e. g. Blommaert 2010) と呼んでいる (この新しい研究は「多様性の社会言語学」と呼ぶことができるだろう。ただし、Blommaert 自身は Sociolinguistics of Globalization と呼んでいる)。そこでは、移民言語の第1の特徴は、移民全体の言語の多様性ではなく、移民個人それぞれの言語レパートリーの多様性であり、母語、社会階層 (学歴や職種)、年齢や性といった従来からの固定的な属性では、現代の移民言語を理解することには不十分であることが主張されている。加えて、移民の言語レパートリーで注目すべき点は、多様な言語リソースが機能的に使用されるその多元性にあるとされる。

本研究では、以上のような言語接触論にもとづく諸研究の成果を参照しながら、接触場面研究、多様性の社会言語学の提供するアプローチに準拠し、移民個人の具体的な言語レパートリーの蓄積のプロセスを記述することが重要と考えた。

2. 研究の目的

本研究は、グローバリゼーションのなかを移動する人びと (以降、移民と呼ぶ) の言語レパートリーに関する社会言語学的研究である。移民言語についてはハイブリッド性、異質性、非体系性など、その多様性が研究されてきた。さらに研究をすすめるために、そうした多様性がどのような言語環境での接触経験や相互行為の蓄積によるのかを明らかにしていくことを目的とした。特に移民が自分の言語能力・言語使用 (特にホスト社会の主流言語について) を現在どのように自己評価し、またこれまで自己評価してきたかを彼らの語りから明らかにしていくことを通じて、追求していった。

3. 研究の方法

本研究では言語レパートリーの変容を縦断的および横断的に調査していくことを考えた。縦断的な調査を主とするつもりであったが、3年から4年のあいだ、継続して調査に応じてくれたのは大学1年生から3年生までに応じてくれた S3-KR (韓国人、3年終了時に兵役のため帰国) と4年生までに応じてくれた S5-VN (ベトナム人) の2名しかいなかった。そのため、横断的調査が収集データの中心となった。

A. 縦断的な調査

4年の期間をつかって定期的に移民と接触し、インタビューをつうじて言語レパートリーの多層的な局面を明らかにすることを試みた。具体的には、(1) 来日直前までの言語バイオグラフィーの収集、(2) 来日直後からの言語環境データの収集、(3) 来日直後からの言語使用に対する意識調査を毎年1回実施した。

B. 横断的な調査

(1) 5年以上日本に暮らす移民の言語レパートリー調査

5年以上、日本社会に暮らす移民を対象にして、言語バイオグラフィー・インタビューを実施し、移民が来日後からホスト社会の人々とどのような接触経験をもち、どのように自分の言語能力や言語使用を評価してきたか、そしてどのように問題に対処してきたかを分析した。本研究では14名の人々からインタビュー・データを収集することが出来た。

(2) 海外に移民した日本人の言語レパートリー調査

グローバル化した世界においては移民の移動は日本以上に激しいものがある。そうした世界各国での移民の言語レパートリーの一端を知ることで、日本に暮らす移民の調査データの一般性や独自性が明らかになるはずである。対照データを収集することで、言語レパートリーに関する仮説を構築する上で重要な視点を提供してくれるものと思われる。本調査では申請者が言語環境などについて比較的周知しているオーストラリア社会をフィールドとして、移民した日本人8名 (長期に滞在している日本人)、韓国人9名の言語レパートリーについて、横断的調査

と同様のデータを収集した。調査は2016年2月と2017年2月に実施された。

4. 研究成果

本研究は移民の言語レパートリーの多様性がどのような言語環境での接触経験や相互行為の蓄積によるのかを、特に移民が自分の言語能力・言語使用(特にホスト社会の主流言語について)を現在どのように自己評価し、またこれまで自己評価してきたかを彼らの語りから明らかにしていくことであった。本研究の成果を理論的研究、量的調査の結果、豪州調査、日本調査における移民の言語問題、の4節に分けて報告する。

(1)理論的研究

本研究はその背景で述べたように、現在の移動する人々の増加にともなう言語レパートリーの多様化に対して接触場面研究を発展させる方向で計画したものである。研究に当たっては先行研究のアプローチや立場を検討したが、特に言語学的エスノグラフィーとの親近性が注目された。Rampton et. al. (2014) が言語学的エスノグラフィーの特徴としてあげた、(i)ダイナミックな偶然性、人間の主体性と解釈を考慮に入れること、(ii)われわれの実践的な意識と日常的な活動に根付いた規則性のパターンや期待を指し示す慣習や制度の構造を考慮すること、(iii)実証的な記述の時空の地平を拡張し、個々のコミュニケーションの encounters を越えた、また事前、事後の複数の歴史、結果と物質的なプロセスを考慮すること、などの3点は接触場面研究の現在の時点でもすべて部分的にカバーされていることを論じた。ただし、言語学的エスノグラフィーが解釈プロセスを重視するのに対して、接触場面研究では認知プロセスを重視するものであり、両者は相補的であることを指摘している。村岡(2016)では、以上のような言語学的エスノグラフィーと接触場面研究のどこに親近性があるのかを吟味し、さらに移民の言語バイオグラフィー・インタビューから言語使用に関する原則と評価がどのような言語管理の軌道によって形成されてきたのかについて記述を試みた。

(2)量的調査

高・村岡(2015、2016)、村岡・高(2016a、2016b)では、外国人居住者91名(留学生71名、社会人20名)に対するアンケート調査を実施し、日本語の他言語への干渉、日本語使用時の意識、日本語能力16項目の習得の自己評価、第1言語から第3言語までの言語能力の4技能評価などに回答してもらった。留学生71名を対象にした村岡・高(2016b)では、(i)日本語能力の自己評価の違いや滞在期間の違いによって、言語使用意識がどのように異なるかを分析し、その要因を考察した。(ii)外国人居住者の出身地域と現在の言語環境を中心に、第1言語と日本語の2言語使用中心のグループ(A-1)と日本語を含む2言語以上の多言語使用中心のグループ(B-2)の日本語使用意識と日本語能力の習得に対する自己評価を分析・考察し、さらにグループ間の比較を通し言語環境と言語使用意識との関係を探った。

考察の結果、以下のことについて新たな示唆を得ることができた。

(a)日本語能力の自己評価は、中評価グループと高評価グループに分かれたが、どちらのグループも「言語使用」と「日本語規範意識」が高く、「調整」、「習得」、「自己規範への志向」においては意識が低い傾向にあることが分かった。

(b)滞在期間が長くなるにつれて、中評価グループが内的場面(同国人同士)での言語の切り替えを意識しているのに対し、高評価グループは同国人や同国人以外の外国人とのネットワークも含めて日本語規範に向かう意識を高めていることが示唆された。つまり、言語コミュニティの形成という視点から考えると、2言語併用の移民コミュニティ形成の方向と、ホスト言語コミュニティへの参加の方向が反映していると思われる。

(d)出身地域での言語使用の習慣が移動先のホスト社会における言語使用に影響を与えていた。出身地域で第1言語(母語)での単言語使用をしていたグループ(A-1)で、日本では母語と日本語の2言語使用を中心とする移民の場合、日本語使用において日本語の規範を志向する意識、即ち母語話者のように話したい、正しい日本語を使用したいという意識が強いことが分かった。それに対し、出身地域でも多言語使用者で日本では日本語を含む多言語使用を中心とするグループ(B-2)の場合は、全体として日本語使用に対する意識および規範意識が高いが、自分らしい日本語の使用を考える意識も高いことが分かった。

(d)日本語能力の習得に対する自己評価については、全体として、A-1とB-2のどちらの言語使用グループも共通して肯定的な評価の割合が否定的な評価の割合より高いが、言語能力と社会言語能力で異なる自己評価が見られ、言語使用グループごとに異なる習得問題を抱えている可能性が示唆された。

以上のようなアンケート調査による量的な傾向は、その後の縦断的および横断的な調査の事例でも観察することが出来た。

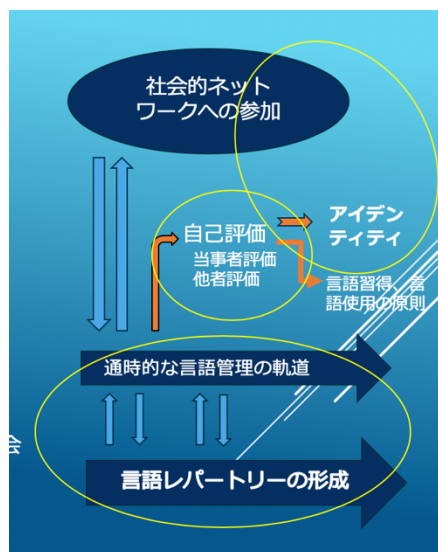
(3)豪州調査

豪州調査の成果は、村岡・倉田(2017)、村岡(2018)、倉田(2018)、高(2017)などにまとめたが、ここでは村岡・倉田(2017)および村岡(2018)について報告する。

村岡・倉田(2017)では、多文化主義の成熟度が大きく異なっており、その違いによって移動する人々のネットワークへの参加の仕方が異なると考えられる日豪の調査の比較を試みた。こ

ここでは言語レパートリーを「個人が時間と空間を移動する中で蓄積してきた、今なお流動的な多数のスタイル、レジスター、ジャンル」(Blommaert 2007)と定義づけた。さらに、言語レパートリーの対象の範囲は言語要素、社会言語要素だけではなく、言語運用の規範や指標的な意味、そして評価、アイデンティティ、言語間序列などに関連する「言語意識」まで含むものとしたが、本論文では言語意識を対象にした。

言語レパートリーがどのように蓄積され、位置づけられているか、という問いに対して本論文では分析の前提として3つの視点を採用した。



(a) 移民個人はホスト社会で接触場面に参加しながら、主体的に言語を管理している。その管理の蓄積が個人の言語レパートリーの多様性を作り上げている。これを通時的な言語管理の軌道と呼ぶ。

(b) 言語に対する行動、つまり言語管理には、言語能力や言語使用に対する自己評価が含まれている。自己評価の語りにはしばしば自分の言語習得や言語使用の原則やストラテジーへの言及が現れる。

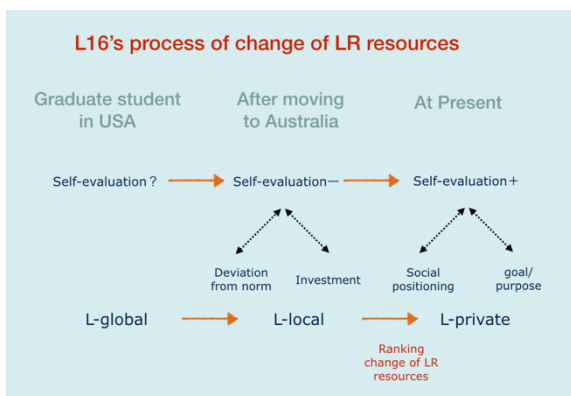
(c) 自己評価の語りには、接触場面の問題とその対応に関する当事者評価(高 2013)と、他者評価(宇佐美 2007)が含まれる。他者評価は、ホスト社会のネットワークにどのように参加し、そこでどのようなアイデンティティを獲得しているかを考察するための糸口になる。本研究では、Norton (2000)のアイデンティティを参考にしている。こうした視点は次の左図のような関係性にある。

分析の結果、日本調査では半数以上に押しつけられたアイデンティティの語りがあったのに対して、オーストラリアでは全員が肯定的な自己評価をし、成功体験の要

約として自分が得た原則を語っていた。押しつけられたアイデンティティも豪州滞在初期の出来事であり、交渉によって解消されていた。この相違の要因としては、豪州社会において他者からも認められたネットワークを比較的築きやすいこと、そしてそのネットワーク構築を支える多文化・多言語社会という土壌があるということが考えられた。

また、村岡 (2018) では、豪州在住日本人 3 名の事例研究に基づき、彼らの言語レパートリー (LR) の変容モデルを作成した。日本社会及びオーストラリア社会の言語環境における個人の LR に関して、状態 LR₁ から状態 LR₂ への変容を、主に 4 つの言語リソースの変容として想定した。

- (a) ホスト社会の主流言語リソース (L-local) の発達/停滞/衰退
- (b) 世界語リソース (L-global) の発達/停滞/衰退
- (c) 個人言語リソース (L-private) の発達
- (d) 出身社会の第 1 言語リソース (L-home) の発達/停滞/衰退



L-local とは、オーストラリアの場合にはオーストラリア英語リソース(中域)を指す。一方、L-global の代表は英語であるが、特にアメリカ及びイギリスの英語リソースを指す。L-private とは、中間言語、言語混交、移民英語 (e. g. World Englishes) 等を含み、(a) や (b) の規範から外れた言語リソースを意味している。また、L-home とは出身社会で主に使用していた言語リソース (e. g. 母語) を指す。変容プロセスにおいて最も特徴的なことは、言語管理がさまざまなレベルで再帰的 (reflexive) に相互に影響し合っているという点にある。

本発表ではどのような要素が言語能力または言語使用の自己評価に再帰的に影響を与えているかに注目した。3名のうち、日本から直接にオーストラリアに渡った L15JP_{au} では L-local が発達していたが、アメリカ留学の経験がある 2 名は L-private を発達させていることが明らかになった。この 2 名については、英語リソースの多様性に対するオーストラリア社会の寛容さ、移民の多様な英語リソースとの接触、オーストラリア英語リソースと世界語リソースの対照、などの経験から、英語規範を相対化して、自分なりの英語変種を形成するに至っていた。彼らにとって英語リソースの選択や言語的アイデンティティの獲得は言語問題として意識されていたと考えられる。L16JP_{au} の LR の変容を左図に示す。

(4) 移動する人々の言語問題

村岡 (2018) では、自己評価の語りを通してこれまでどのような問題を管理の対象としてきたのか、言語使用と関連してどのような社会的な位置づけを構築して現在に至っているのかを分析したが、これまでさまざまな論文や発表で扱ってきた日本の移民 14 名 (6 カ国イラン、ブラジル、フィリピン、韓国、ベトナム、中国) を概観した。

- (a) 滞在年数が長い外国人住民の多くが、移民コミュニティ(日本語の言語コミュニティも含む)に参加している。
- (b) 3言語使用者(英語、日本語、母語)か2言語使用者(日本語、母語)かによって、管理の対象となる言語問題と社会的位置づけの在り方は異なる。
- (b-1) 移民コミュニティに参加していない2言語使用者(グループ1)は、外来性を潜在化させる管理を行っている。外来性を潜在化させることで、「外国人」としてカテゴリー化されることを避けようとする。彼らは日本語規範からの逸脱を留意しやすく、否定的な自己評価が一般的である。準拠できる日本語コミュニティが不在であるために、日本語母語話者の規範を目指した習得のための投資が行われやすい。
- (b-2) 移民コミュニティに参加している2言語使用者(グループ2)は、コミュニティが社会参加の拠点となっており、主流社会に機能的に参加することが多い。また、外来性の管理を重視しない傾向がある。移民コミュニティは、日本語規範xと母語規範yとが併存する speech community である。日本語規範 x は、移民の日本語能力が停滞していることを示している一方、母語規範 y は、移民がホスト社会で新たな言語レパートリーを構成していることを示している。こうした speech community は準拠できる日本語コミュニティとして機能して、肯定的な自己評価をする背景となっているものと思われる。
- (b-3) 3言語使用者(グループ3)は主流社会からの要請に積極的に対応することで英語をふくむ多言語話者としての社会的位置づけを得ることが多いが、同時にアイデンティティの問題の語りが見られる。

村岡(印刷中)では、移動する人々の語りから彼らの言語問題を考察した。3名の外国人居住者の言語バイオグラフィー・インタビュー調査により、彼らの日本語能力および日本語使用に対する要約的な評価と項目的な評価の語りを分析した。さらに、そうした評価が来日以降のネットワーク形成そしてそこでの参加の在り方とどのように関連しているかを事例研究から明らかにし、彼らと日本社会との間に横たわる言語問題を考察した。

・言語問題 I: ネットワークによる言語レパートリーの多様性

移動する人々がどのような言語を使用しているかを明らかにすることは、言語問題を指定する上で最も基礎的な作業であり、彼らの言語レパートリーは参加してきたネットワークの言語環境との関わりによって多様になる。

・言語問題 II: 日本語非母語話者として位置づけられること

3名が共通に語ってくれたことは、日本語能力に対する自信のなさであった。外国にルーツをもつ人々が使用する言語バリエーションの存在が、社会に承認されるかどうかの問題であり、承認されない場合には、非母語話者としての位置づけを強いられ、自信をもつことが出来ないといった否定的な評価が継続することになる。

・言語問題 III: 日本社会への参加とアイデンティティの承認

人々との関係づくりに関して、Norton (2000)では社会の主流メンバーが移民に対して強いイメージと移民自身が望ましいと考えるイメージとが不一致の状態となることをアイデンティティの葛藤と述べている。3名の語りにおいてもこうした葛藤は存在していた。葛藤への対処は2種類の方向で見られた。1つは自分の外来性を潜在化する方向、2つめは自分の持ってきた言語や文化の規範を保つことを優先することであった。こうした対処には、積極的に規範を守りながら社会参加をしていくか、消極的に規範が守られるように社会参加を最小限にしていくかという2つの態度が見られた。

以上のような事例によって多様な言語レパートリーと社会的位置づけの語りが明らかになることから、多言語政策においてはこうした個人の言語問題をとらえるボトムアップ・アプローチによる言語政策が望ましいことを指摘した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 9 件)

1. 村岡英裕 (印刷中) 移動する人々の語りからみる言語問題—ボトムアップ・アプローチによる言語政策のために— 社会言語科学 社会言語科学会 査読有
2. 村岡英裕 (2018) 移動する人々の言語レパートリーと言語的アイデンティティに関する研究ノート—豪州在住日本人の事例— 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書 No. 334, pp. 74-88.
3. 高民定 (2018) オーストラリアにおける韓国人移民の言語レパートリーと言語管理 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書 No. 334, pp. 45-66.
4. 村岡英裕 (2017) 移動する人々の言語レパートリーに関する研究ノート—日本語の自己評価の語りはどのように構築されているか— 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書 309, pp. 62-82.
5. 村岡英裕 (2016) 言語使用の評価を通してみる習慣化された言語管理の軌道—言語学的エスノグラフィーと接触場面研究の親近性をめぐって— グローバル・コミュニケーション研究第4号特別号 神田外語大学 pp. 141-168. 査読有
6. 村岡英裕・高民定 (2016a) 日本の外国人居住者のコミュニケーションの実態調査の中間報告 2 —留学生の言語使用意識を中心に— 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト

報告書 No. 307, pp. 115-139。

7. 村岡英裕・高民定 (2016b) 日本在住の移動する人々の言語使用意識—留学生の滞在期間と言語習慣に焦点を当てて— *Journal of Linguistic Study* Vol. 21, No. 3, December. The Korean Association of Language Studies, pp. 219-241. 査読有
8. 高民定 (2016) 日本の外国人移住者の言語環境と言語管理—言語バイオグラフィーの通時的・共時的語りの分析から— *グローバル・コミュニケーション研究*第4号特別号 神田外語大学 pp. 169-196. 査読有
9. 高民定・村岡英裕 (2015) 日本の外国人居住者のコミュニケーションの実態調査の中間報告 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書 No. 292, pp. 125-145.

[学会発表] (計 11 件)

10. 村岡英裕 (2018a) 移動する人々の言語レパトリーの変容と言語問題—オーストラリア在住日本人の事例— (韓国言語研究会春季大会 済州大学校 2018. 6. 30)
11. 村岡英裕 (2018b) 移動する人々の習慣化された言語管理の語りはどのような多言語社会の言語問題を語っているか 多言語社会と言語問題シンポジウム 2018、言語管理研究会 (東海大学高輪校舎 2018. 12. 22) 査読有
12. 倉田尚美 (2018) 豪州在住の日本人の言語管理とアイデンティティ: 日英両言語の自己評価の語りを通してみえるもの 多言語社会と言語問題シンポジウム 2018、言語管理研究会 (東海大学高輪校舎 2018. 12. 22) 査読有
13. 村岡英裕 (2017) 移動する人々の言語問題の射程—言語能力の自己評価の語りに見る歴史性、他者性、社会的位置づけをめぐる— 社会言語科学学会大会招待発表 (関西大学、2017. 9. 17)
14. 村岡英裕・倉田尚美 (2017) 日豪における移動する人々の言語レパトリー調査—社会ネットワークへの参加の文脈に焦点を当てて— 社会言語科学学会大会 (2017. 3. 19 杏林大学) 査読有
15. 村岡英裕 (2016) インタビュー調査の文脈から見た日本の移動する人々の言語使用に対する評価について「移動する人びとの言語使用と言語管理」公開研究会 (2016. 1. 23 千葉大学)
16. 倉田尚美 (2016) メルボルン在住日本人の言語管理とネットワークの特徴について 「移動する人びとの言語使用と言語管理」公開研究会 (2016. 1. 23 千葉大学)
17. 高民定・村岡英裕 (2016a) 外国人居住者のアンケート調査の中間報告 「移動する人びとの言語使用と言語管理」公開研究会 (2016. 1. 23 千葉大学)
18. 高民定・村岡英裕 (2016b) 外国人居住者の日本語使用に対する当事者評価—単言語使用出身者と多言語使用地域出身者の言語習慣との関わりを中心に— 社会言語科学学会大会口頭発表 (2016. 3. 20 日本大学) 査読有
19. 高民定 (2016) 外国人居住者の言語環境と日本語使用に対する通時的評価: 言語バイオグラフィーのケーススタディーから 「移動する人びとの言語使用と言語管理」公開研究会 (2016. 1. 23 千葉大学)
20. Muraoka, Hidehiro (2015) The Significance of norms in Language Management Theory: A Theoretical Review. *Fourth International Language Management Symposium* (Sophia University, 26-27 September 2015) 査読有

[図書] (計 1 件)

21. Hidehiro Muraoka, Sau Kuen Fan and Minjeong Ko. (2018). Methodological considerations for the study of accustomed language management: An ethnographic approach. L. Fairbrother, J. Nekvapil and M. Sloboda (eds.), *The Language Management Approach: A Focus on Research Methodology* (Prague Papers on Language, Society and Interaction). Berlin: Pter Lang Publisher. 査読有

6. 研究組織

(1) 研究協力者

研究協力者氏名: 高民定 (千葉大学)、サウクエン・ファン (神田外語大学)、倉田尚美 (モナシユ大学)

ローマ字氏名: Ko, Minjeong, Fan, Sau kuen, Kurata, Naomi